

書 評

Raymond Williams: The Long
Revolution (Chatto and Windus,
London, 1961)

山 本 和 平

1

レイモンド・ウィリアムズ(一九二一—)が日本の一部の英文学研究者のあいだで関心をもたれはじめたのは、『イブセンからエリオットまでの劇』(Drama from Ibsen to Eliot, 1952)からであったとおもう。当時、T・S・エリオットの詩劇に代表されるいわば詩劇復興のきざしとイブセン以来の自然主義演劇との関連をとらえた批判的な研究書の著者としてウィリアムズは新鮮な魅力であった。

六年後に出版された『文化と社会』(Culture and Society 1780~1950, 1958)は、ウィリアムズの関心の領域が単に演劇や文学に局限されず、ひろくイギリスの文化・社会におよぶものであることを示した。従来のイギリス近代文学史の叙述方法、あるいは文学を即的に絶対化する研究方法に疑惑をもつ

ていた英文学研究者には、いわゆる「社会」と思想と文学とを全体として把握しようという著者の方法はまことに示唆にとむものであった。

産業革命がイギリス人の生活様式を変革し、「人間」におよぼした影響とその意味に関してはたんにそれが「政治」における進歩派と反動派とを生みだしたというにとどまらず、同時に「文学」をもゆるがす大問題であったことはイギリス・ロマン派の活動をみても明瞭であろう。ウィリアムズが「文化」(Culture)「民主主義」「産業」「階級」等の用語を、一七八〇年から一九五〇年の期間の精神的動向をさぐるキー・ワードとみて、それらの意味内容の拡大・深化・明確化等の変遷過程を、文学作品や思想的著作や政治的論文等の具体性において分析してみせた手際は鮮かであった。たとえば冒頭、エドモンド・バークとウィリアム・コベットをならべて、前者に保守主義の後者に進歩主義の源流をみる在来の素朴な社会思想論を拒否して、両者の、その反ブルジョア性における共通面を強調し、さらにそこからイギリス・ロマン派の思想構造を解析してみせるあたりまことに巧みであるとおもわれた。

Culture なるコトバが語義上の混乱を極めていること、しかもそれは常に、希求さるべき価値として、ことに「人間性」の危機が認識されるときはきまきまって最も有力な努力目標、あるいは反省の起点として措定されてきたこと——こうした観点からは Culture の「伝統」を明確にしようという企図は、いわゆるアパシー状態にある現代イギリスの精神状況の打開のための、十

分に現代的な、情勢論的な、つまりは主体的な仕事であったとおもう。

さて昨年ペリカン叢書にも入った『長期の革命』のペリカン版への緒言によると、本書は『文化と社会』以上の論議を呼んだらしい。私のみた『新左翼評論』九号、十号(一九六一)にまたがるE・P・トムスンによる長大な批評は実にすさまじいもので、論の当否は別としてもその批評の酷烈さは、本書が少くとも問題作であることを傍証すると共に、共通の目標をもつものの中にのみ可能な相互批判のあり方というものをうかがわせるに十分であった。

ウイリアムズにたいする私の興味の一部は、彼が自己の関心の拡大にともなう研究領野を拡大していく知的貪婪さ、新著を必ず旧著の成果と論議の反省の上に大胆に拡大修正していくその仕事の主体的性格である。

こうした知的貪婪さと主体的——自立的といった方がいいかもしれない——研究態度は現状打開の意欲の当然の帰結なので、在来の現実把握のパタンの破産、非生産性、拘束性の認識が前提されているわけである。

たとえば、E・P・トムスンも指摘しているが、彼の「文化」概念はT・S・エリオットのそれに大きく影響されているだろう。しかし彼が組み立てようとしている文化史の構図は、ヨーロッパ社会をキリスト教によるひとつの精神共同体とみなすためのエリオット式の構想の破産の認識が根柢にあり、むしろイギリス社会史に近いものである。

おそらく、彼が直面している問題の核心には、現代イギリスの閉塞状況を打開する方向の摸索——しかも単なる政治主義、経済主義、精神主義の非力・破産の認識にたつたそれ——があるのである。そしてその際登場するのが全生活様式としての「文化」なる概念なのだ。

方法は主体的でないかぎり真に生産的ではないわけであるから、状況打開のためには伝統的なアプローチの局限性の破壊に必然的にむかうだろう。序論で、ケムブリッジ大学の英語教師ウイリアムズは「学者の分別」をふりすてて、広くさまざまなテーマをとりあげたことについて、「私にとって興味のある問題を追及しうる学科目がない」からいたし方がなかったと断り、いつかはしかるべき科目ができることを希望しているが、いづこもおなじアカデミックなナワバリ精神が学問的研究の障害となっているらしい。しかも彼の直面した問題の緊急性は、彼一人のものではなく、かなり一般的であることは、前著『文化と社会』がまきおこした論議からも明瞭に看取しうるところである。

2

本書は三部に分かたれる。第一部はいわば理論編であり、「創造的精神」「文化の分析」「個人と社会」「社会像」の四章よりなる。本書のなかで最も生彩ある部分である。第二部はいわば歴史編で、「教育とイギリス社会」「読書階級の発達」「大衆紙の発達」「標準英語の発達」「英国作家の社会史」「演劇形

式の社会史」「リアリズムと現代小説」の七章よりなる。第三部は「一九六〇年代のイギリス」と題され、現状認識と将来の展望を語っている。

「長期の革命」なるタイトルは、『文化と社会』の結論中の「いままでわれわれの世界を変えてきたしまた現に変えつつある勢力は産業と民主主義である。この変化、この長期の革命の理解は、容易に到達しえない意味のレベルにある。」からとったものである。

本書では「産業」と「民主主義」における革命のほかに「文化」の革命が重要な主題として真正面からとりあげられていることは本書の目次からして一目瞭然である。これは教育・学問・芸術その他高度のコミュニケーションをふくむものであり、また産業革命、民主主義革命とは切り離しては考察しえぬもので、産業と民主主義における進歩と相互作用に深く影響されているから、個々別々の変化の過程としてではなく、全体的過程として把握されねばならぬわけである。

本書の概念を扱った第一部は特に生彩があるといったが、たとえば第一章「創造的精神」は、脳・神経生理学的認識装置を芸術的創造に応用した点で興味があり、第二章「文化の分析」は「感情の構造」なる概念を創出して、ある時代社会の住民以外には決して経験しえないあるもの、「時代の文化」とでもいうべきものが芸術のなかに集約されていることを指摘して芸術の重要性と文化伝統の成立方法について説くあたり、また第三章「個人と社会」では、「社会」とか「個人」とかいう、手垢

にまみれ、ほとんど無内容と化しながら相も変わらずわかつたつもりで流通している術語を再検討し、「社会」と「個人」とをつなぐ媒介項として「共同体成員」「主従」「叛逆者」「亡命者」「自己亡命者」などを考案し、「社会」と「個人」との対立を克服して個人の独自性が民主主義社会の基礎となる所以を説き、また第四章「社会像」では「社会」をもっぱら「政治」・「経済」の二領域に還元する見方のあやまりを衝き、社会関係を構成する他の二大要因、学習・通信制度及び家族関係を導入して、この四者を同等の資格においてみるべきことを提唱している。

ウイリアムズの所説にはたしかに、E・P・トムスの酷評するように、たとえばマルクスやウエーバーやマンハイムやトニーを真正面からとりあげてその批判を通して独自の新しい観点を提供するという風にはなっていない。また私にもそれをやる力はない。しかし私にとって「芸術的創造」は重大な関心なので、以下第一章に限ってウイリアムズの説を紹介し批評を加えてみたい。

3

第一章「創造的精神」の最も注目すべき点は、「創造」という従来かなり神秘化されてきた芸術家の精神の営為を、一貫してコミュニケーションの観点からとらえたこと、しかもその有力な理論的基礎として脳・神経生理学を利用したことである。

プラトン、アリストテレス以来、フロイトやユングに至る芸術論を歴史的に概観し、要するに芸術的創造については諸説紛紜であるという。そこに「脳及び神経系の過程として知覚をとらえる最近の一書」があらわれて、これによってはじめて決定的な一歩をふみだすことができるという。この本はロンドン大学の解剖学教授 J・Z・ヤングの『科学における懷疑と確信——生物学者の脳についての省察』(J・Z・Young: *Double and Certainty in Science—a Biologist's Reflections on the Brain*, 1950)である。このヤングの書は一九五〇年 B・B・C のリス記念講演の原稿に補筆を加筆して出版されたもので、画期的な科学思想として一大センセーションをまきおこしたものであり。脳・神経生理学における最近の成果をふまえながら言語・科学・社会・人生へと自由に論を展開していく一種の啓蒙書で真の「教養」の典型をみせてくれるような本である。

さて、古来、*reality* (現実・実在)なる語が芸術的創造に関して用いられる際に、あらゆる流派に通じる共通の前提があった。すなわち、①「普通の日常的知覚といったものがある」こと、②「これはある種の間人、ある種の活動によって例外的に超越されうる」こと、③「そしてたいのばあい、この日常的知覚の所産を「リアリティ」とよび、したがって芸術家の知覚の所産をこの「リアリティ」の変更(組織化、理想化、超越)とみななければならぬこと、である。

このような日常的知覚と芸術的知覚の対立、「現実」と「芸術」の対立は、芸術・芸術家のエリートの性格づけに結果する

という指摘は、ロマン派以来、ますます孤立化の度を増してきた芸術の閉塞状況を打開する際の認識としては大切であろう。秘教的になることによって芸術がますます貧困化した面は否定できないのである。

著者はヤングの「われわれ各人の脳が、各人の世界を文字通り創造する」という衝撃的な一文を引用し、知覚における質の差異を否定すると同時にいわゆる主体と客体との絶対的分離を否定する。脳が世界を創造するという表現は実に危険な反響をもった表現であって、いわゆる観念論的臭いがしないでもない。しかしそうではなくて素朴実在主義の虚妄を脳生理学的に衝いた表現なのである。

さて著者は、ヤングのこの一文を梃子として、したがって「創造」とはたんに芸術家の活動についてのみ言われるべきでなく「あらゆる人間の精神の活動」であるという。またヤングは「周囲の世界からわれわれの感官を通してうけとる情報は、いわゆるリアリティが形成されるより前に、ある人間的な規則にしたがって解釈されねばならない」という。すなわち、「外界」(ヤングのいう「われわれの周囲の世界」)からの情報が感覚受容器を通して脳に伝えられると脳は、すでに学習した規則にしたがってこれを解釈し「リアリティ」が構成されるということになる。

いわゆる「外界」(われわれの意識の外に独立してある世界)と「現実」とはここでは区別されているわけで、別でなければ各人の脳による解釈、「各人の世界の創造」という表現は意味

をなきないわけである。ではカント流の物自体の不可知論か。しかし感覚主体から独立した「外界」の存在は前提され、「情報」は「外界」に依拠するものと仮定されているから観念論ではあるまい。「リアリティ」なる語の定義が異なるわけで、彼らはい、「リアリティ」は各個人に属すると了解すればいい。

生理学者ヤングの、実験可能な科学の強みにたった発言は、古来の認識論の根本問題と直接からんでくるわけで、哲学的思考の装置を混乱あるいは再整理へみちびく結果になるのではなかろうか。

ウィリアムズはこうした「リアリティ」形成の過程における主体関与の必然性の事実を認識せよというヤングの説がいろいろ困難な哲学的問題をまきこむことを恐れて、賢明にもこれに立ち入らない。そして確実なものとして結論的に次のようにいう。「各個人において、遺伝と文化を通じてのこれらの規則の学習は次の点において一種の創造である。すなわち、明らかに人間的な世界、彼のカルチュアが限定する通常の『リアリティ』は、諸規則が学習されるときのみ形成されるといふ点においてである。」

在来の芸術論は模倣説であれ創造説であれすべて「リアリティ」と「芸術」の二元論を前提としていた。しかしヤングの新しい知覚論によって、「人間の観察と解釈が入りこまない」ところの人間によって経験しうる現実があるという仮定は崩れる。したがって「あるがままに見る」ことを可能だと仮定し、これを主張する素朴リアリズムはなりたたなくなるわけである。リア

リティの成立、すべての人間的経験は非人間的現実の解釈である、主観的であり同時に客観的なプロセスであるというのが彼の強調するところなのだ。

ところで芸術はコミュニケーションをめざす。すべての生物体はそれぞれ通信系をもつが、人間のばあい、言語・身振り・音楽・数学等がこれであるが、これらは社会的学習過程の一部である。芸術はこのような全般的コミュニケーション（以下コミュニケーションを「通信」と訳す。「伝達」は一方交通にきこえるし、「通信」は郵便を連想させるのでうまくないがしかたない。「共有活動」ではもってまわりたい方だし、「コミュニケーション」は長すぎる。）の一種で、「強烈な形式」である。したがって学習された通信系の共有のない、かぎり作品を見る（文字通り）ことはできない。つまり芸術は能動的な通信を實現しえないなら芸術は存在しえない。芸術的通信は芸術家と読者・観客の双方が参加する活動で、芸術的通信が成立するときには人間的経験が能動的に提供され、能動的に受容される。このような活動の闕以下では芸術は存在しえない。

このような芸術観、たとえば文学を作家と読者との、言語を媒介にした協力的な活動の場それ自体とみる見方は非常に重要な指摘だと私はおもう。芸術を享受者から独立した純粹な客体とみる常識が、主体ばなれの実証主義的、あるいは文献学的作業を唯一の学問的文学研究——その資料的客観性ゆえに——というように誤解させる原因になっているからである。そもそも作品（言語）を介する人間的経験の交流・共有がない限り、い

かに客観的にみえる研究も、文学研究でないことは確かである。むろん文献学的方法、社会学的方法、心理学的方法等、文学研究のいわば補助学としての独自の価値はあるわけで、ただそれ自体では文学研究たりえないことを言ったにすぎない。文学は作家と読者との中間にある活動なのだ。

さて、芸術的通信の目的は、すべての通信がそうであるように、価値のある経験の通信で、その際やはり特殊な経験伝達の技術を利用する。これは通信を強調する立場からは妥当な立言であろう。むろんここで、経験の伝達技術の所有者としての芸術家の側面が強調され、伝達さるべき経験の、芸術家における豊富化・深化及び経験内容の質そのものが不問に付されている点、反論が予想されると私はおもう。そもそもウイリアムズは「経験」の定義を全然やらないために、語義上のアイマイさが終始つきまとう。なぜなら「経験」を描写し叙述以前にあるものとみるのか（もしそうとすれば「経験」そのもの、「経験」内容の質が当然問題になるだろう）、あるいは、すべての知覚はある規則を通して外界より受容されたものであるから、人間の経験という以上、「経験」はすでに解釈されたものであるとみるなら、あとは伝達技術だけが問題になるだろう。

ところが「叙述は通信の一機能」で、「経験がリアライズされるには叙述されねばならない」と著者は言っている。「リアライズ」とは一体いかなることか。大変アイマイである。こうしたアイマイさは前述の、芸術はひとつの通信系で、「強烈な形式」であるというばあい、しからは「インテンス」とはいかに

インテンスなのかについての説明がなく——芸術の特殊性（特権性ではない）を説くばあいこの点こそ重要なのに——ひたすら通信の一形式に還元・解消してしまったのに対応するだろう。

しかし芸術家の創作衝動の説明をみると、「経験」とはどうやら未整理のものらしい。「経験」は叙述をまっしてはじめて明確化されるものらしい。しからは、脳中に学習された規則以外を通して知覚されるものもあるのか。とすればさきの定義に矛盾してこないのか、「知覚」と「経験」とはいかなる関係にあるのか、という疑念がただちにおこってくる。こうした点に關しての叙述は一切ない。私はここでは「経験」なる語を素朴にうけとっておくことにしよう。

さて、経験の叙述は芸術家のみならずすべての人間にとって大切である。なぜなら自分の経験の叙述によって自己を改造することになる。すなわちパーソナリティの創造的变化をもたらす。経験の叙述への衝動は、新しい経験がまだ組織化されない状態、いわば一種の「混乱」にたいする構えであり、それに妥当な叙述を与えることによって、新しい経験をひきおこした混乱を克服しうるのである。

著者は必ずしも生物学者ヤングの芸術観には全面的に賛成ではない。芸術的通信の内容についての次の説には反対なのである。ヤングは言う、「創造的芸術家は新しい働き方をする頭脳をもった観察者である。だから、以前には通信の主題にはならなかったような事柄について他者に伝達しうるのである。通信

の手段の探求によってわれわれの観察力は鋭くなる。この点において芸術家と科学者の発見は全く似ている。」

これに対してウイリアムズは、ヤングの説は古い「創造」観の残渣である、価値ある芸術がすべて「新しい」というのは事実には反しているという。なるほど芸術家のなかには「孤独な探険家」型もあるだろう、しかし「所属する共同体の声」、すなわち代表型の芸術家もいる。後者は新しい経験を提供はしませんが、共通の既知の経験を「認知」させてくれる。芸術家をすべて経験の拡大に貢献するもの、「認識の開拓線」に勤務する」ともこのように見方は妥当ではないというのである。

同じくヤングのこの書『科学における懐疑と確信』の所説にかなり共鳴し、同じく上記の一節を自説の補強として肯定的に引用しているひとに、詩人・詩論家のC・デイ・ルイスがいる。彼は『詩人の認識方法』(The Poet's Way of Knowledge, 1957)のなかで上記の一節を引用し、「数学のコトバを使用しえない諸科学の直面している最大の問題は、その観念を伝えるに有効なコトバの発見の問題である」といい、新しい領域を開拓する科学者の方法と、新しい経験の叙述・伝達を企てる詩人の方法との類似性を強調している。(このルイスの著書については『言語文化』2号の拙稿を参照していただきたい。)

ウイリアムズはルイスのこの書をおそらく読んでいたに違いない。そして詩人的活動を「認識の開拓線の勤務」とみるルイスの所説への批判をこめているのではなからうか。私としてはウイリアムズの芸術IIコミュニケーション論には原則的に賛成

だけれど、彼のいう「強烈な通信形式」である芸術のなかでも「強烈な」詩的活動をば走り書き的に、ほとんど否定的にか言及していないのは遺憾である。

むしろ詩的活動を孤立させて神秘化することはあやまりであろう。近代産業社会における芸術の「擁護」的風潮が生ずる必然性を著者も認めながら、しかしこの問題の真の解決は、芸術を真摯な実際の関心の対象としない社会に背を向けることによってではなく、日常的経験から切りはなすことなく、「一般的人間の活動(学習・叙述・通信)のひとつ」として位置づけることによってなしとげられるという。

前述したように、コミュニケーション(通信)とコミュニケーション(共同体)とは相互に原因であり結果である。人間社会は共通の意味と共通の通信手段の発見によって発展する。個人の脳の創造したボタンと共同体によって物質化されているボタンとは不断に相互作用を営んでいる。個人の創造的叙述は、共同体が価値づける意味(「共通の意味」)が共有され機能するための慣習・制度をつくりだす一般的過程の一部となるのである。

本来通信とは経験の共有、独自の経験を共通の経験にするプロセスである。「通信の過程は共同体の過程なのだ。」これが芸術が他の人間的諸活動と共に社会的意義であり、芸術を近代産業社会において救済する方法である。

以上『長期の革命』の第一章を紹介・論評したが、私の関心に即していうと、はたしてこの芸術IIコミュニケーション論でどれだけ「詩」を説明しうるか、詩的経験はむしろコミュニケーション

ン(communion)とよばねばならぬような「強烈な形式」なのではないか。ウイリアムズの所説は散文的叙述には妥当しえても詩に適用するばあいにはかなり留保条件を付ける必要があるとおもわれる。

それに彼の「創造」理論がほとんど全面的に依拠しているヤングの書は、最近の生理学的成果をふまえたものとはいえ、生理学的領域をのみだし、文学・社会学・心理学・人類学等のテ

ーマを生理学的観点から自由に解釈・展開した啓蒙書であるところにはやはりそこばくの疑念がないわけではない。

(これは本年一月の語学研究室の第二五回月例研究発表でおこなった『長期の革命』紹介の原稿をもとにした。その際の討論、批判を参考にさせてもらって一部書き改めたことを付記する。)

(一九六六・二・二〇)(一橋大学助教授)